



Title	大都市と農漁村部におけるアイヌの生活
Author(s)	品川, ひろみ
Description	第2章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 39-59
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48973
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_004.pdf



第2章 大都市と農漁村部におけるアイヌの生活

品川ひろみ

札幌国際大学短期大学部准教授

はじめに

本章では都市部と農漁村部に居住するアイヌの人々へのインタビュー調査から、それぞれの地域に居住するアイヌの人々のこれまで経験や意識、さらには今後の生活などについて明らかにする。そして都市部と農漁村部に居住する人では、これまでの経験や意識に違いがあるのか、あるとすれば、それはどのような違いなのかについて確認していきたい。

その際、つぎの点に着目しながら見ていく。1つには生活という視点である。それについては、現在の状況について明らかにし、今日に至るまでの軌跡を、学校教育と就業の状況から明らかにする。2つ目としてはアイヌ民族であることをどのように捉え、これまでどのような経験をし、今後はどのように考えているかということである。

章の構成は次のようになっている。第1節では対象者の概要について、第2節では学校教育、第3節では卒業後の職業についてみていく。第4節では、アイヌ性、今後の希望などについてどのように考えているのかを明らかにしていく。

第1節 基本状況

本調査が対象とするのは、大都市部である札幌51人と、農漁村部であるむかわ61人、合計112人のアイヌの人々である¹⁾。

はじめに、対象者が現在どのような家族状況にあるのかを確認しよう。世帯構成の比率では、一般的に都市部で単身世帯が多い傾向があると言われている。本調査の結果をみると、札幌ではひとり暮らし10人(19.6%)、ふたり家族13人(25.5%)が目立ち、4人までの家族構成が全体の8割近い。一方、むかわは、ひとり暮らしは2人(3.3%)のみで、ふたり家族が19人(31.1%)、5人以上の家族も16人(26.2%)となっており、農漁村部であるむかわのほうが都市部である札幌と比べて家族規模が大きいことがわかる(表2-1)。なお、別居家族の人数を確認すると、札幌とむかわで大きな違いは見られなかった。

では婚姻の状況はどうであろうか。現在、結婚しているかどうかをみると、表2-2のように、札幌よりむかわのほうが既婚率が高い。とくに老年層では、札幌では既婚者が男女合わせて7人(13.7%)のみであるが、むかわでは15人(24.6%)が既婚者である。ちなみに札幌では離別が6人(11.8%)、死別も5人(9.8%)だが、むかわでは離別が2人(3.3%)、死別は1人(1.6%)となっており、それらの違いが現在の家族構成に影響を与えていると考えられる。

表2-1 家族規模

単位：人、%

	札幌				むかわ			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
1人	1	2	7	10	0	0	2	2
	2.0	3.9	13.7	19.6	0.0	0.0	3.3	3.3
2人	4	4	5	13	0	7	13	19
	7.8	7.8	9.8	25.5	0.0	11.5	21.3	31.1
3人	2	3	5	10	2	5	5	12
	3.9	5.9	9.8	19.6	3.3	8.2	8.2	19.7
4人	3	7	0	10	4	6	1	11
	5.9	13.7	0.0	19.6	6.6	9.8	1.6	18.0
5人	2	0	3	5	4	2	0	6
	3.9	0.0	5.9	9.8	6.6	3.3	0.0	9.8
6人	0	0	0	0	4	3	0	7
	0.0	0.0	0.0	0.0	6.6	4.9	0.0	11.5
7人	0	2	0	2	2	0	0	2
	0.0	3.9	0.0	3.9	3.3	0.0	0.0	3.3
8人	1	1	0	2	0	0	0	0
	2.0	2.0	0.0	3.9	0.0	0.0	0.0	0.0
9人	0	0	0	0	1	0	0	1
	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	1.6

注)セルの上段は実数の表記、下段は各地域毎のデータ総数(札幌：51, むかわ：61)を分母とする百分比(%)となっている。

表2-2 婚姻状況

単位：人、%

	札幌				むかわ			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
未婚	8	2	0	10	6	1	0	7
	15.7	3.9	0.0	19.6	9.8	1.6	0.0	11.5
既婚	4	11	7	22	8	14	15	37
	7.8	21.6	13.7	43.1	13.1	23.0	24.6	60.7
離別	0	4	6	10	2	5	2	9
	0.0	7.8	11.8	19.7	3.3	8.2	3.3	14.8
死別	0	2	5	7	0	1	1	2
	0.0	3.9	9.8	13.7	0.0	1.6	1.6	3.3
再婚	0	0	2	2	1	2	3	6
	0.0	0.0	3.9	3.9	1.6	3.3	4.9	9.8

注)表2-1の注を参照。

つぎに対象者の職業を見ると、都市部と農漁村部では年代層によって多少違いが見られた(表2-3)。20～30代の青年層については、そう大きな違いはない。農漁村地域であっても、農業や漁業に従事しているものは少なく、2人のみという現状である。それ以外は営業販売職、事務職などで、都市部の職種と同様の傾向である。だが年齢層が高くなると都市部と農村部では違いが見られる。もっとも異なっているのは60代以上の老年層である。札幌では老年層であっても、20人中9人(45.0%)が生産労務職や管理的な職についているが、農漁村部で仕事をもっているのは21人中7人(33.3%)のみであり、そのうち5人が農林漁業職となっている。また札幌の壮年層では専門技術、販売、建設など多職種であり安定的な職種も散見されるが、むかわでは男性10人中4人が農漁業(40.0%)、5人(50.0%)が生産労務職、運輸通信職などのブルーカラー、1人のみが事務職員だが嘱託という現状である。

老年層の違いについては、都市部と農漁村部の職業選択の幅の違いが影響していることが考えられる。つまり札幌のような都市部では高齢であっても働ける場があるが、農漁村部では壮年層の職業に見られるように、農漁業、製造、配送などは高齢では体力的に厳しいことが、仕事を続

表2-4 世帯年収

単位：人、%

	札幌		むかわ	
	実数	%	実数	%
200万未満	6	11.8	14	23.0
200万～400万未満	14	27.5	23	37.7
400万～600万未満	7	13.7	7	11.5
600万～800万未満	5	9.8	4	6.6
800万～1,000万未満	1	2.0	1	1.6
1,000万以上	2	3.9	4	6.6
不明	16	31.4	8	13.1
合計	51	100.0	61	100.0

けられない理由と見ることができ、それらの違いが老年層の就業率の違いとなって表れていると考えられる。

経済的な状況はどうだろうか。札幌とむかわで世帯年収を比較すると、世帯年収200万円未満が札幌では6人(11.8%)なのに対し、むかわでは14人(23.0%)と倍以上となっている(表2-4)。200万～400万未満についても、札幌では14人(27.5%)であるが、むかわは23人(37.7%)となっている。一方で年収の高い層を見ると、600万～800万未満では札幌が5人(9.8%)、むかわは4人(6.6%)、800万～1,000万円未満は札幌、むかわともに1人、1,000万円以上は札幌では2人(3.9%)だが、むかわでは4人(6.6%)となっており、とくにむかわにおいてはごく少数を除けば、年収の低さが目立っているといえよう。

第2節 学校教育歴

先に現在の職業について大まかに見てきたが、対象者たちはこれまで、どのような足どりで現在の生活に至ったのだろうか。そこで、学校教育とこれまでの職業について見ていこう。

表2-5は学校段階別に卒業した者の数を示したものである。回答者数に対して、上から順に小学校卒業数、中学校卒業数、高校卒業数、専修学校卒業数、大学(短大を含む)卒業数を実数、各学校段階の卒業率で表している。この表から専修学校以上の高等教育を受けた人を確認すると、札幌では29.4%、むかわでは21.3%となっている。またそれとは逆に中学校まで卒業した者(高校中退を含む)を確認すると、札幌90.2%、むかわ88.5%と農漁村部であるむかわの方が、教育の機会に恵まれていないという結果であった。

またこれらの学校教育歴は年齢層によっても大きく異なっている。中学校までは札幌とむかわでは多少の違いが見られる程度であるが、高校を見ると、青年層では札幌83.3%に対してむかわ58.8%、壮年層は札幌63.2%、むかわ52.2%、老年層は札幌30.0%、むかわ14.3%と老年層にいたっては倍近い違いが見られるのである。

さて、上級学校に進学しなかった理由や中退してしまった理由を聞くと以下のようなものがある。

「中退の理由は、昼に働き夜に学校へ通う余裕がなかったから」(むかわ 老年)

「大学に行きたかったが学力、やりたい事がない等の理由で断念。お金の問題がなければ…大

表2-5 学校段階別卒業生数および卒業率

単位：人、%

	札幌				むかわ			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
小学	12	19	17	48	17	23	19	59
	100.0	100.0	85.0	94.1	100.0	100.0	90.5	96.7
中学	12	19	15	46	16	23	15	54
	100.0	100.0	75.0	90.2	94.1	100.0	71.4	88.5
高校	10	12	6	28	10	12	3	25
	83.3	63.2	30.0	54.9	58.8	52.2	14.3	41.0
専修	5	2	1	8	2	5	1	8
	41.7	10.5	5.0	15.7	11.8	21.7	4.8	13.1
大学	6	0	1	7	4	1	0	5
	50.0	0.0	5.0	13.7	23.5	4.3	0.0	8.2
N	12	19	20	51	17	23	21	61
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

学で勉強した。」(札幌 青年)

「勉強が嫌いなので考えてなかった」(札幌 青年)

「早く働きたかった。勉強が嫌いだったから進学はしなかった。就職をしてからは遊ぶ時間が欲しかった」(むかわ 青年)

「今となっては、高校に行っておけば楽しそうだなと思った。しかし、勉強嫌いだったし。行ってもやめると思った」(むかわ 青年)

「高校の頃大学に行きたくて受験をした。合格もしていたが家庭が貧しくあきらめた。叔父からの援助の話もあったが、迷惑をかけられないと思い断った」(むかわ 壮年)

「学校は行きたかった。大学へ行って好きな勉強をしたかった。断念は経済的な理由」

(むかわ 壮年)

「看護師や美容師になりたかった。経済的理由でいけなかった。」(札幌 壮年)

「学力的、経済的理由から断念した。もしもそれがあつたら高校くらいは出たかった。もしかしたら人生が変わっていたかも知れない。」(むかわ 老年)

「義務教育ぐらいまでは受けたかった。生活も苦しかったし、小学校も満足に出席してなかったので進学できなかった。」(札幌 老年)

このように、①経済的な要因、②勉強が好きではなかった、③働きたかったという要因が多い。しかしこれらの要因は何か一つが影響したというよりも、複合的に合わさり、結果として進学しなかったという理由に繋がっている。

むかわのある壮年男性は以下のように述べている。

「全くない(進学の意思)。勉強好きじゃなかった。大勢の中でなじめなかったのかもしれない。早く働きたかったかもしれない」

このように勉強が好きではないこと、人間関係の難しさ、働きたいという意思など複数の理由がある。また、これらの話を聞くと、進学を断念したというよりも、そもそも考えなかったという人も非常に多いことに気がつく。

表2-6 青年層の最終学歴とその理由

札幌		むかわ	
学歴	理由	学歴	理由
専修	語学が好き、面白かった	大学	—
専修	勉強が苦手	高校	早く働きたい・勉強が嫌い
専修	学力・やりたいことがない	専修	自分の意思で専門学校へ
大学	母親の助言で進学	中学	働きたかったので高校中退
専修	手に職をつけようと自ら	中学	自分で行かないと言った
短大	—	中学	勉強が嫌い・行っても(中退か)
短大	とくになし(断念していない)	高校	—
高校	勉強が嫌い	大学	まだ試験がある。アイヌの影響
大学	大学進学は親の希望	短大	幅広い4年生に行けばよかった
大学	大学院は…行けばよかった	高校	金銭的に行けなかった
専修	考えなかった	大学	—
短大	成績下がり仕方なく短大へ	中学	すぐ仕事したかった
注)中退者は網掛けで示している		高校	—
		中学	勉強する気がなかった
		高校	就職に簿記など必要なかった
		高校	勉強嫌いだった 親のすすめ
		専修	親にすすめられ進学

とくに進学率が高い時代に該当する青年層に着目して比較すると、札幌とむかわでは異なる傾向が見られる。札幌では12人中7人が高等教育を考えている。考えなかったとする者は12人中2人だけである。一方でむかわは高等教育の進学を考えた者は17人中3人だけであり、むしろ「はやく働きたい」2人、「勉強が嫌い」3人などが目立つ。さらに学校の中退が札幌では2人であるが、むかわでは7人と多いことも異なる点である(表2-6)。これらの違いも、最終学歴の違いに影響していると考えられる。

また進学の際に「就学援助資金」を利用したかどうかについて聞いたところ、札幌では31人、むかわでは30人が利用していた(表2-7)。とくに壮年層、老年層では自分自身の時は制度がなかったが、子どもの進学の際に使用したという発言も目立っていた。

「今思えば、子どものことでウタリに助けられた。アイヌの血が混じていたからだと思う。シャモの人は子どもの教育費を自分で払っていると思うと、この制度は本当にありがたい」
(札幌 壮年)

一方で就学援助資金について利用しなかった理由を見ると、使えることを知らなかったというものと、使う必要がなかった、使うことで子どもがどのように感じるか危惧したためという理由も見られた。

「自分は使っていない。使えるかどうか知らなかった。」(札幌 壮年)

「金銭面で苦勞していないから」(むかわ 青年)

「存在自体知らなかった。長女は使うと恥ずかしいと思って、本人がそういうの知られると嫌かなと思った。(しかし)長男は使った。協会に入っていたから、使わないともったいないと言われたから。」(むかわ 壮年)

表2-7 最終学歴と就学援助資金

札幌				むかわ			
学歴	卒	利用	利用時期	学歴	卒	利用	利用時期
専修	卒	有	高校	大学	卒	無	
専修	卒	有	専門学校	高校	卒	有	高校入学時
専修	卒	有	高校・専門	専修	卒	有	専修学校
大学	在	有	大学	大学	卒	有	高校・大学
専修	卒	無		中学	卒	無	
短大	卒	有	高校・短大	中学	卒	無	
短大	卒	無		中学	卒	無	
高校	中	無		高校	中	無	
大学	卒	有	高校・大学	短大	中	有	短大
大学	卒	有	大学・専門	高校	卒	無	
専修	卒	有	高校	大学	卒	有	高校・大学
短大	卒	有	短大	中学	卒	無	
専修	卒	有	専門学校	高校	中	無	
高校	卒	無	※子ども	中学	中	無	※子ども
高校	卒	有	不明、※子ども	高校	卒	無	
高校	中	一		高校	中	一	
高校	卒	無		専修	中	一	
中学	卒	一		高校	卒	無	※子ども
高校	卒	有	高校	専修	卒	有	専門学校
高校	卒	無	※子ども	高校	卒	無	
高校	卒	無	※子ども	専修	卒	有	高校
中学	卒	無		専修	卒	無	※子ども
高校	卒	無	※子ども	大学	卒	無	※子ども
専修	中	有	不明	中学	卒	無	
高校	卒	有	高校	高校	卒	無	
高校	中	無	※子ども	高校	中	無	
中学	卒	無	※子ども	高校	卒	無	
高校	卒	無	※子ども	高校	中	無	※子ども
高校	卒	有	高校	高校	卒	無	※子ども
中学	卒	無	※子ども	高校	卒	有	高校
高校	卒	無	※子ども	高校	卒	有	高校
大学	中	無		高校	卒	無	※子ども
中学	卒	一	※子ども	専修	中	無	※子ども
高校	卒	一		高校	中	無	※子ども
小学	中	一		高校	卒	無	※子ども
高校	卒	無		中学	卒	無	※子ども
中学	卒	無		高校	卒	無	※子ども
中学	中	一		専修	卒	無	※子ども
大学	卒	無		専修	卒	無	※子ども
中学	卒	一		高校	中	無	※子ども
中学	卒	一	※子ども	高校	卒	無	※子ども
中学	卒	無	※子ども	中学	卒	無	
中学	卒	無	※子ども	中学	卒	一	
小学	中	無	※子ども	中学	卒	無	
高校	卒	無		中学	卒	無	
高校	卒	無	※子ども	高校	中	無	
小学	中	無		中学	中	無	
中学	卒	一		中学	中	無	
中学	卒	無	※子ども	小学	中	一	
小学	卒	無		中学	卒	無	※子ども
中学	卒	一		高校	卒	無	※子ども
				中学	卒	無	
				中学	卒	一	
				中学	卒	無	※子ども
				中学	卒	一	※子ども
				中学	中	無	
				専修	卒	無	
				高校	卒	無	※子ども
				中学	卒	無	
				小学	中	無	
				中学	卒	無	

注) 卒=卒業
 中=中退
 一=本人が利用したかどうか不明
 ※子ども=本人の利用はないが子どもの就学時に利用した

第3節 学校卒業後の足取り

第1項 初職

さて、学校卒業後はどのような職についたのだろうか。ここでは都市部と農漁村部の初職についての比較をしてみよう²⁾。

まず青年層である。先に都市部では老年層であっても職業選択の幅があることを見たように、都市部ではすべての年齢において多様な職種に就いているのではと予測される。しかし青年層においては、札幌とむかわではそう大きな違いはなかった。札幌では専門的な仕事は介護のみで、それ以外は単純労働が多く雇用形態も臨時的な形態が多いといえる。だからといってむかわが安定的な生活であるともいえない。農漁村であるという地域の産業を生かした仕事は漁業の1人のみであり、こちらでもやはり単純な仕事が多く、また臨時的であるということも共通である。

こうして都市部と農漁村部の比較をすると、地域の特徴による違いは見られない。たとえば、むかわの老年層では農業や漁業さらには地場産業である馬関連の仕事が見られるが、壮年層ではわずかに3例が見られ、青年層では1例のみが漁業に関わっただけと、農漁村地域という特色に関連した仕事は、以前は多かったものの徐々に減少していることがわかる（表2-8）。また通常都市部はさまざまな職種の仕事があり選択の幅が広い印象があるが、本調査に関して言えば、都市部であっても職業の幅は限られており、農漁村部と比較して大きな違いがないように見られる。

表2-8 年齢層別初職の比較

青年層		壮年層		老年層	
札幌	むかわ	札幌	むかわ	札幌	むかわ
介護	人材派遣業	自動車整備工	電気屋	電気関係	魚屋（販売）
塗装	製造業	電報配達	建築関係	洋服屋見習い	自動車整備工場
コールセンター	漁師	自衛隊	自動車整備	クレジット会社	土木作業
警備アルバイト	発掘現場	ディスコ店員	土木関係	子守	農業手伝い
新聞配達	電気工事	大工	漁業	道路工事	農業手伝い
自動車工場	自動車工場	ブロック工場	化粧品メーカー	開拓	農業
ガソリンスタンド	運転助手	レストラン	車屋	家電販売	馬の仕事
アルバイト	造園業	デパート	山の仕事	教師	競馬関係
調理師	カラオケ店	ホテル従業員	運転助手	酒の配達	木材関係（出面）
調理助手	美容関連	踊り子	製造業	床屋	農業
服の販売	発掘現場	経理事務	美容師	看護師	公務員
アルバイト	美容師	飲食店	事務職	ハシづくり	さまざまな仕事
	保育	事務員	ウエイトレス	パチンコ屋	鍛冶屋
	ウエイトレス	看護師	本屋	ホテル従業員	農業手伝い
	販売	みやげもの販売	事務職	看護師	農業手伝い
	製造	食品工場	紡績工場	家政婦	自衛隊
	事務	ウエイトレス	製造工場	農家	事務
		美容師	事務	工場	農業
		紡績工場	農業	農家	工場労働
			薬品会社	理容師	保線
			床屋		
			美容師		
			看護師		

第2項 仕事の辛さ

次に実際に仕事ではどのような経験をしていたのだろうか。仕事を通して辛かったことを見ると、1.「身体的な辛さに由来するもの」、2.「アイヌ民族であることに由来する経験」、3.「その他」に分類することができる。もっとも多かったのが、身体的な辛さに関する発言である。

「立ち仕事は体に合わなかった」(札幌 青年)

「山・川などキツイ現場のとき」(札幌 壮年)

「気候的なこと(暑さ・寒さ・雨・風など)」(むかわ 壮年)

「肉体的、身体的につらい仕事で、丸太の間に足を挟んで折ったりしていた。仕事を変えていったのは基本的に追い込まれていたから。」(むかわ 老年)

また、全体からみれば多くはないが、アイヌ民族であることから受けた差別的な発言なども見られた。その中には、自分自身が差別され辛いとするものと、アイヌ民族の中で生活していくことの難しさを述べる者も見られた。

「夜の仕事、アイヌ民族といわれるのが辛かった」(札幌 老年)

「ずっと辛かった(仕事上で)アイヌを出して欲しくない(と言われた)」(むかわ 老年)

「アイヌの人は焼酎飲んでだらしない人が多い、そういう人を雇うのは苦労しました」

(むかわ 老年)

このように見ると、アイヌ民族であることだけを理由に差別された経験を持つものは、それほど多いとはいえない。しかしそれは「差別を受けないために結果が求められ、並々ならぬ努力をしたこと」(むかわ 老年)と述べている人がいるように、仕事を通して差別を受けないために努力するという側面があったと見ることができる。

第3項 転職と転居

さて、仕事を通しての辛い経験に伴い、転職をした人も多い。多い人ではこれまで8回程度職を変えている。これまで5回の転職を経験したという人は、札幌では21人、むかわでは20人と半数には満たないものの、3分の1程度の人が多く転職を経験しており、これら転職の回数に都市部と農漁村部での違いは見られず、どちらの地域にも転職経験が多い人が確認された。

それともなあって、現在の生活に落ち着くまで転居したことがある人も少なくない。これまでの転居経験を確認すると(表2-9)、むかわでは転居したことがないとする者が11人(18.0%)見られるが、札幌では1人(2.0%)のみである。また実際の転居回数を見ると、札幌では4回がもっとも多く、それを中心になだらかな山になっている。一方でむかわは、2回が15人(24.6%)ともっとも多い。つまり現在札幌に居住している人の方が転居回数が多いということになる。

表2-9 転居歴

単位：人、%

	札幌				むかわ			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
0回	0	1	0	1	04	2	5	11
	0.0	2.0	0.0	2.0	6.6	3.3	8.2	18.0
1回	0	0	1	1	0	3	1	4
	0.0	0.0	2.0	2.0	0.0	4.9	1.6	6.6
2回	4	0	1	5	7	3	5	15
	7.8	0.0	2.0	9.8	11.5	4.9	8.2	24.6
3回	0	2	3	5	2	7	3	12
	0.0	3.9	5.9	9.8	3.3	11.5	4.9	19.7
4回	5	3	5	13	1	4	3	8
	9.8	5.9	9.8	25.5	1.6	6.6	4.9	13.1
5回	0	4	2	6	1	1	2	4
	0.0	7.8	3.9	11.8	1.6	1.6	3.3	6.6
6回	2	3	1	6	1	1	1	3
	3.9	5.9	2.0	11.8	1.6	1.6	1.6	4.9
7回	0	2	1	3	1	0	0	1
	0.0	3.9	2.0	5.9	1.6	0.0	0.0	1.6
8回	0	0	0	0	0	1	0	1
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	1.6
9回	1	1	2	4	0	0	0	0
	2.0	2.0	3.9	7.8	0.0	0.0	0.0	0.0
10回	0	0	2	2	0	1	0	1
	0.0	0.0	3.9	3.9	0.0	1.6	0.0	1.6
11以上	0	3	2	5	0	0	1	1
	0.0	5.9	3.9	9.8	0.0	0.0	1.6	1.6

注)表2-1の注を参照。

第4節 アイヌ性について

第1項 アイヌの血筋

さて、対象者の人々はアイヌ民族であることで、これまでどのような経験をし、その経験をどのように考えているのだろうか。

まずはじめに、アイヌの血筋について確認していこう。本人がアイヌ民族の血を引く場合には、父母のどちらもアイヌである場合と、父母の一方がアイヌである場合がある。そこで回答者の全体像を把握するため、親や祖父母の血筋をもとに3つに分類した。

本人を中心として父親、母親共にアイヌであり、さらに祖父母もアイヌ民族の血筋をひく場合を「A」、父親、母親ともにアイヌの血筋をひく者を「B」、父母のどちらかがアイヌの場合を「C」として、地域別に比較したのが表2-10である³⁾。

だが表にあるように、同じBやCに属する場合でも祖父母がアイヌかどうかによって血筋の濃さが変わる。そこで、祖父母の血筋をもとにアイヌの血筋の比率を算出した。

すると、全体に青年層よりも壮年、老年の方が高い比率であるが、札幌では年齢層が高いほど比率も高くなっていったがむかわでは壮年層が高かった。また地域による比較をすると青年層がもっとも異なっており、札幌が35.4%に対してむかわ43.3%と8ポイントも高かった。全体平均でも札幌50.0%、むかわ52.4%と、むかわのほうが高くなっている(表2-11)。

表2-10 アイヌの血筋

単位：%

札幌					むかわ				
世代	本人	分類	両親	祖父母	世代	本人	分類	両親	祖父母
青年層	25	C	和・ア	和・和・ア・和	青年層	50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		25+	C	和・ア	和・和・不・ア
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		50	C	ア・和	ア・ア・和・和
	25	C	和・ア	和・和・和・和		100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア
	25	C	和・ア	和・和・ア・和		75+	B	ア・ア	ア・ア・不・ア
	25	C	ア・和	ア・和・和・和		25+	C	和・ア	和・和・不・ア
	25	C	和・ア	和・和・和・ア		50	C	ア・和	ア・ア・和・和
	50+	B	ア・ア	不・ア・不・ア		50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	25	C	ア・和	和・ア・和・和		25+	C	和・ア	和・和・不・ア
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		50	C	和・ア	和・和・ア・ア
壮年層	50	C	和・ア	和・和・ア・ア	壮年層	50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	25+	C	ア・和	不・ア・和・和		25	C	ア・和	和・ア・和・和
	25+	C	ア・不	ア・和・不・不		25	C	和・ア	和・和・和・ア
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		和	—	和・和	和・和・和・和
	和	—	和・和	和・和・和・和		25+	C	和・ア	和・和・不・ア
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		和	—	和・和	和・和・和・和
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		25+	C	不・ア	不・不・ア・不
	50	B	ア・ア	ア・和・ア・和		100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	50	C	和・ア	和・和・ア・ア		50	C	ア・和	ア・ア・和・和
老年層	50	B	外・ア	外・外・ア・ア	老年層	75+	B	ア・ア	不・ア・ア・ア
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		50	B	ア・ア	和・ア・和・ア
	和	—	和・和	和・和・和・和		75	B	ア・ア	ア・ア・外・ア
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		50	C	外・ア	外・外・ア・ア
	50+	B	ア・ア	ア・不・ア・和		和	—	和・和	和・和・和・和
	50	C	外・ア	外・外・ア・ア		50+	C	不・ア	不・不・ア・ア
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		25+	C	ア・和	不・ア・和・和
	和	—	和・和	和・和・和・和		50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	和	—	和・和	和・和・和・和		和	—	和・和	和・和・和・和
	50+	C	ア・不	ア・ア・不・不		25	C	ア・和	ア・和・和・和
青年層	75+	B	ア・ア	不・ア・ア・ア	青年層	50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	75+	B	ア・ア	和・ア・ア・ア		75	B	ア・ア	ア・和・ア・ア
	50	C	外・ア	外・外・ア・ア		100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア
	和	—	和・和	和・和・和・和		75	B	ア・ア	ア・和・ア・ア
	100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア		50	C	ア・和	ア・ア・和・和
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		75+	B	ア・ア	不・ア・ア・ア
	100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア		50+	C	不・ア	不・不・ア・ア
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		50	C	ア・和	ア・ア・和・和
	100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア		50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	50	B	ア・ア	ア・和・和・ア		25	C	和・ア	和・和・和・和
老年層	50	C	外・ア	外・外・ア・ア	老年層	75	B	ア・ア	ア・和・ア・ア
	和	—	和・和	和・和・和・和		和	—	和・和	和・和・和・和
	100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア		100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア
	50	C	ア・和	ア・ア・和・和		75	B	ア・ア	ア・和・ア・ア
	100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア		25	C	ア・和	和・ア・和・和
	50	B	ア・ア	ア・和・和・ア		75	B	ア・ア	ア・和・ア・ア
	50	C	外・ア	外・外・ア・ア		50	C	和・ア	和・和・ア・ア
	和	—	和・和	和・和・和・和		50	C	ア・和	ア・ア・和・和
	和	—	和・和	和・和・和・和		100	A	ア・ア	ア・ア・ア・ア
	和	—	和・和	和・和・和・和		50+	C	不・ア	不・不・ア・ア

注) 1. 和=和人,ア=アイヌ,外=外国人,不=不明。
 2. 親が養子である場合は、血筋を中心に算出した。
 そのため祖父母すべてがアイヌであっても両親どちらかの表記が和人となっている場合の比率は50としている。
 3. 祖父母や両親が不明の場合、アイヌであればさらに血筋が濃くなるとして+という表記を加えた。

表2-11 アイヌの血筋 (%)

	札幌	むかわ
青年	35.4	43.3
壮年	52.8	57.4
老年	58.3	55.3
平均	50.0	52.4

第2項 アイヌ民族であることの気づき

アイヌ民族であることを自覚した時期について見ると（表2-12）、「小学校低学年」前後を一つのピークとして、その前後に自覚した者と、「高校卒業から20代」前後を次のピークとする2つの時期が多い。これを札幌とむかわで比較すると、札幌では「小学校入学前」がもっとも多く、むかわでは「小学校低学年」が多い。ただしこれには年齢層が関連している。

札幌の小学校入学前は老年層の7人、壮年層の4人が影響している。青年層だけを見るとその時期は1人のみである。一方でむかわは、小学校低学年がもっとも多く、どの年代も見られる。また、むかわでは「自然に」アイヌであることを自覚したとする者が多いのも特徴である。

さらにアイヌ民族であることを自覚したきっかけに目をやると（表2-13）、全体では「アイヌ文化にふれた」こと25人、「友人他に言われた」23人、「親に言われた」22人、「家族・祖父母・その他親戚に言われた」19人などが多い。他には「自然に」17人「外見」12人などが目立つ。

とくに「親から言われた」「家族・祖父母・その他親戚に言われた」「友人などから言われた」と、誰かに告げられたことをきっかけとしていることが多い。またこれらの項目について札幌とむかわを比較すると、「親から言われた」は札幌で26.1%、むかわ18.9%、「友人などから言われた」は札幌では17.4%だがむかわでは28.3%と違いが見られる。

札幌とむかわの違いは他にもある。「アイヌ文化にふれた」ことをきっかけとする者は、総数では札幌もむかわも大きな違いはないが、年齢層を見ると青年層では札幌は4人いるが、むかわの青年層は該当者がいない。つまり「アイヌ文化にふれる」ことが契機になった青年がいないのである。さらに自分がアイヌ民族であることを「自覚していない」とする者が、札幌では見られないが、むかわでは青年層と壮年層で5人の該当者がいる。これはアイヌ民族が多い地域であるため、アイヌであることを「自覚していない」のか、先に見たように「文化にふれる機会がない」から

表2-12 アイヌであることを自覚した時期

単位：人、%

自覚した時期	札幌				むかわ			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
生まれたとき	0	1	1	2	0	1	1	2
	0.0	5.6	6.3	4.3	0.0	5.9	5.0	3.8
小学校入学前	1	4	7	12	1	1	3	5
	8.3	22.2	43.8	26.1	6.7	5.9	15.0	9.4
小学校低学年	3	2	2	7	4	5	8	17
	25.0	11.1	12.5	15.2	26.7	29.4	40.0	32.1
小学校高学年	0	5	1	6	2	1	2	5
	0.0	27.8	6.3	13.0	13.3	5.9	10.0	9.4
中学校	1	1	2	4	0	1	2	4
	8.3	5.6	12.5	8.7	0.0	5.9	10.0	7.5
卒業後高校	1	1	0	2	2	0	0	2
	8.3	5.6	0.0	4.3	13.3	0.0	0.0	3.8
卒業後20代	3	1	3	7	3	3	1	7
	25.0	5.6	18.8	15.2	20.0	17.6	5.0	13.2
30代以降	0	2	0	2	0	0	1	1
	0.0	11.1	0.0	4.3	0.0	0.0	5.0	1.9
自然に	3	1	0	4	2	4	2	8
	25.0	5.6	0.0	8.7	13.3	23.5	10.0	15.1
無回答	0	0	0	0	1	1	0	2
	0.0	0.0	0.0	0.0	6.7	5.9	0.0	3.8
合計	12	18	16	46	15	17	20	53
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

自覚していないのかこれだけでは断言できないが、重要な観点であると思われる。

「踊り、言葉を使っているとき、親に言われて」(札幌 青年)

「お母さんから聞いた」(札幌 青年)

「母の活動に参加して、皆で舞って踊っているので違うと気がついた」(札幌 青年)

「お父さんからアイヌの血が入っているとされたが、小さい頃から知っていたような気がする」(札幌 青年)

「友だちに言われて意識したが、そうかなと思った。今も曖昧なままでアイヌの血が入っているか分からない」(むかわ 青年)

「友だち同士でアイヌ、アイヌと言いあったのがきっかけ。遊んでいる時にアイヌという言葉を書くにつれて意識」(むかわ 青年)

「体育大会のときにアイヌと言われたことを覚えているが、その時ははっきりと自覚したわけではなかった。名字で自分がアイヌであることを分かったが…」(むかわ 青年)

「母の影響でアイヌ協会の行事に参加していた」(むかわ 青年)

さて、アイヌ民族であることを、子どもの頃に自覚した人が多かったが、その頃アイヌ以外の方とのかかわりはどうだったのだろうか。全体を見ると、もっとも多かったのは「仲良く付き合っ

表2-13 自覚したきっかけ

単位：人、%

自覚したきっかけ	札幌 (N46)				むかわ (N53)			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
親に言われた	5 10.9	6 13.0	1 2.2	12 26.1	4 7.5	4 7.5	2 3.8	10 18.9
祖父母・親戚に言われ	0 0.0	4 8.7	3 6.5	7 15.2	3 5.7	3 5.7	6 11.3	12 22.6
友だち他に言われ	2 4.3	2 4.3	4 8.7	8 17.4	3 5.7	5 9.4	7 13.2	15 28.3
アイヌ文化にふれ	4 8.7	7 15.2	2 4.3	13 28.3	0 0.0	6 11.3	6 11.3	12 22.6
周りの影響	0 0.0	1 2.2	1 2.2	2 4.3	2 3.8	2 3.8	2 3.8	6 11.3
結婚	0 0.0	0 0.0	2 4.3	2 4.3	1 1.9	2 3.8	1 1.9	4 7.5
アイヌ協会の関係	1 2.0	0 0.0	0 0.0	1 2.2	1 1.9	2 3.8	2 3.8	5 9.4
外見	1 2.2	3 6.5	4 8.7	8 17.4	0 0.0	1 1.9	3 5.7	4 7.5
いじめられた	0 0.0	1 2.2	3 6.5	4 8.7	1 1.9	0 0.0	5 9.4	6 11.3
自然に	4 8.7	3 6.5	2 4.3	9 19.6	4 7.5	2 3.8	2 3.8	8 15.1
覚えていない	1 2.2	0 0.0	0 0.0	1 2.2	1 1.9	0 0.0	0 0.0	1 1.9
自覚していない	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 5.7	2 3.8	0 0.0	5 9.4
その他	0 0.0	2 4.3	2 4.3	4 8.7	3 5.7	3 5.7	1 1.9	7 13.2

注)セルの上段は実数、下段は無回答の者を除く、各地域毎のデータ総数(札幌：46、むかわ：53)を分母とする百分比(%)である。

いた」69人、「いじめられていた」20人などが多い。地域別で見ると（表2-14）、「仲良く付き合っていた」と答えた人は、札幌では28人（54.9%）、むかわでは41人（67.2%）と札幌よりむかわのほうが多い傾向が見られる。またいじめられた経験を持つ人については札幌12人（23.5%）、むかわ8人（13.1%）と札幌のほうがいじめられたとする経験を持つ者が多い。年齢層別に見ても、札幌はどの年齢層でもいじめられた経験を持つ人がいるが、むかわでは壮年層ではいじめられた経験を持つ者が見られない。

表2-14 アイヌ以外の人との交流 単位：人、%

アイヌ以外の人との交流	札幌				むかわ			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
仲良く付き合う	7	12	9	28	10	19	12	41
	13.7	23.5	17.6	54.9	16.4	31.1	19.7	67.2
よくケンカをした	0	1	0	1	1	1	1	3
	0.0	2.0	0.0	2.0	1.6	1.6	1.6	4.9
いじめられた	4	2	6	12	2	0	6	8
	7.8	3.9	11.8	23.5	3.3	0.0	9.8	13.1
いじめていた	0	0	0	0	1	0	0	0
	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0
関わりがなかった	0	0	0	0	1	0	0	0
	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0

注)表2-1の注を参照。

第3項 結婚の苦勞

結婚についてはどうだろうか。本調査の対象者のなかで結婚した経験を持つ者は札幌で41人、むかわで54人であった⁴⁾。その中で結婚をする際にアイヌだということが苦勞の要因であると答えた者は、札幌では5人（12.2%）、むかわで11人（20.4%）、となっている（表2-15）。もっとも多いのは「苦勞したことがない」というものである。札幌では14人（34.1%）、むかわでは21人（38.9%）とわずかにむかわのほうが高い比率である。

このように見れば、アイヌ民族であるからといって、誰もが結婚に対して困難を経験しているわけではない。

ある壮年の男性は

「結婚の前にアイヌと言ったが、とくに問題にはならなかった。妻の親族にも反対はなかった」（札幌 壮年）と述べている。

しかし、これまでの経験を語ってもらった中には厳しい現実が垣間見れる。事実、アイヌであることで反対を受けたというものも見られる。むかわの青年女性のなかには

「両親の反対、相手がアイヌ民族の方だから」（むかわ 青年）というもののや、

「両親は気にしなかったが、遠い親戚はいいのか？と言っていた。主人の姉の結婚の際（アイヌ）は、相手の親の反対が10年ほどあった。子どもが生まれてから3～4年で認められた」（むかわ 青年）などの話がある。

また自身が和人であるむかわの壮年女性は

「自分の母親にずーっと反対されて泣かされた。子どもを置いて帰っておいでと言われた。…

表2-15 結婚する際の苦勞

単位：人、%

結婚する際に苦勞したこと	札幌 (N41)				むかわ (N54)			
	青年	壮年	老年	小計	青年	壮年	老年	小計
アイヌであること	1 2.4	2 4.9	2 4.9	5 12.2	1 1.9	5 9.3	5 9.3	11 20.4
経済的な問題	0 0.0	2 4.9	1 2.4	3 7.3	1 1.9	2 3.7	0 0.0	3 5.6
その他	2 4.9	4 9.8	5 12.2	11 26.8	2 3.7	6 11.1	7 13.0	15 27.8
なし(苦勞)	1 2.4	6 14.6	7 17.1	14 34.1	5 9.3	8 14.8	8 14.8	21 38.9

注)セルの上段は実数、下段は各地域毎の既婚者(再婚、離別、死別を含む)のデータ総数(札幌：41、むかわ：54)を分母とする百分比(%)である。

長女、二女にも反対された。」(むかわ 壮年)

これらは結婚相手の一方が和人であることの苦勞である。だがアイヌ同士でも反対はみられる。札幌の男性は

「アイヌ同士での結婚に家族から反対された。「子どもが濃くなるから」アイヌの顔がかわいくてもアイヌと分かる顔ならみたくない」(札幌 壮年)という理由である。

またむかわの壮年女性も

「アイヌとアイヌが結婚したら子どもがかわいそう」と主人の親に言われた。「せっかく薄めたのに何で濃くするんだ」と。「父親が苦勞したので子どもの見た目などを気にしていた。」(むかわ 壮年)

すでに見たように、アイヌのルーツを見ると、両親共にアイヌである者は少なかった。その背景には、アイヌの人々自身の中に、「血を薄くしたい」と考えた人がいたことがあるといえよう。実際に結婚や恋愛の際に民族性を考慮した(された)ことはあると答えた者は26人となっており、その中には結婚の際には苦勞していないと答えた者もある。

札幌に在住するあるアイヌの壮年男性も結婚の際に苦勞したことは「ない」と答えている。しかし話がすすむと、以下のような話題になっていった。

「アイヌの人は遠慮したいという思いはあった。生まれてくる子どものこと(毛深さや彫りの深さなどの容姿)を考えるとできれば…奥さんはアイヌだったら結婚しない、とくに純粋なアイヌだったら…」と言いながら、自分がアイヌ差別をすることになると気づき、「アイヌの女性とそういう関係にならなかったのだから分からない」とその考えを否定するように話していた。

また、札幌の和人である老年女性は

「相手の母親は和人を連れてきてくれたことに大歓迎だった。」という。

ほかにも、札幌の壮年のアイヌ女性は

「結婚した後に義弟にアイヌなの?と聞かれ、夫が「違う」と言った。夫の家は古い家柄なの

で、アイヌの血が入るのを嫌がっているようだ。今も言っていない」と言う。

このように、全般的に見ればアイヌの人すべてが結婚に反対されているわけではない。しかし事実としてアイヌということに反対されているという現状はあり、そこに札幌とむかわの違いはあまり確認できなかった。

第4項 過去のアイヌ性

これらを見るときには、地域比較が難しい面があった。回答者が幼い時に居住していた地域を確認すると、農漁村部であるむかわでは、多くの者が現在住んでいる地域ないしは周辺地域に居住していたが、大都市部である札幌は、現在は札幌に居住しているが、生まれや育ちは他の地域であり、人生の何処かの時点で札幌に転入してきた者が多かったからである。

実際に札幌在住者の状況を確認すると、生まれも育ちも札幌である者はわずか6人となっている。さらにその内の1人は和人である。つまり大多数の人たちは現在札幌に居住していても、その多くが胆振、日高を中心としたアイヌが多く居住する地域の出身であり、幼い頃はその地域で過ごしている。ではそれらをふまえて改めてみてみよう。

札幌で生まれ育ったアイヌの血を引く者5人の内訳をみると、青年層が3人、壮年層が2人で、すべて戦後生まれである。彼らはどのような経験をしているのだろうか。

「親戚(静内)がアイヌに関わる話をしていた。サケをとるための道具がおばあさんの家にあった」(札幌 青年)

「学校での授業でアイヌ文化を学んだり、木彫り、手芸をする人がいた」「母親、おじの家にアイヌの民具があった。家の端にイナウがさがる。祭りに使う皿が置いてある。母親と儀式に出たりしてアイヌ文化に触れた。イチャルパは無宗教なので墓ではなく、儀式として参加していた。」(札幌 青年)

このように、日常の中にあるというよりも、儀式としてみている者が多い。

一方で同じ札幌に居住していても、幼い頃は地方で育った者は異なる経験を持っている。

「母、祖母がアイヌ料理を作る。アイヌ語で悪口を言ったりする。祖母はアイヌ語が出来たはずだ。衣装タマサイなどが家にあった」(札幌 青年)

「ひいお祖母ちゃんがポロトコタンで踊っているのを見ていた。歌、ムックリとか。母はポロトコタンの売店で働いていた」(札幌 青年)

「母がアツシに使うアツをよるのを手伝ったことがある」(札幌 壮年)

「祖母、母の姉は刺繍、叔父はクマの木彫りをしていた。家で母がクマの木彫りの内職をしていた」(札幌 壮年)

このように、地方で育った者は、イベントとしてよりも日常的にそれを見ているものもある。子どもの頃の経験としても、祖母や周囲の人が入れ墨をしているのを目にしていたり、アイヌ語を

聞く、宝ものや神々への祈りなどの伝統文化を見たことがあるという経験が多く、アイヌ民族が集住している地域においては、それらを目にする機会が多かったことがわかる。

第5項 アイヌ性について

アイヌ民族であることを意識しているかという問いについては、全体で見ると農漁村地域よりも都市部のほうが「意識しない」とする者が多い。これらの答えは今後の生活についても同様の傾向が見られる。

今後の生活について「アイヌとして積極的に生きていきたい」「とくに民族は意識せず生活したい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」の選択肢を用意して尋ねたところ、「アイヌとして積極的に生きていきたい」と答えた者は、札幌15人(29.4%)、むかわ16人(26.2%)とほぼ同程度であるが、「とくに民族は意識せず生活したい」を見ると、札幌は20人(39.2%)である一方で、むかわは32人(52.4%)と多い。

アイヌとして積極的に意識して生きていきたいという意見には、次のようなものがある。

「自分より上の人がないので、アイヌであることを意識しながらアイヌであることを教えていきたい」(札幌 老年)

「見た目もアイヌだから。理想は意識しないで生きていけるのがいい」(札幌 老年)

「ここまできたらそれしかない。アイヌだからこそここまで来れたことを親に感謝している」(札幌 老年)

「自分がおこなっている活動(刺繍や歌・踊りなど)を伝えていきたい」(札幌 老年)

これらを見ると自分の考えや知っていることを他者に伝えたいという、実際に行動の意思をともなったものが多いことがわかる。それに対して、意識せずに生活していきたくと考える例としては、次のようなものがある。

「アイヌ民族であることと、今の状況は関係ない。意識せずとも変わらない」(札幌 青年)

「自分はアイヌですと積極的にいう必要はない。拒否する必要もない。助けられた部分があるのはありがたい」(札幌 壮年)

「民族を意識せず生活している」(むかわ 壮年)

今までどおり、隠しもしないし、意識もしない」(むかわ 壮年)

これらの意見は前回のアンケート調査結果でも指摘されているように、アイヌ民族であることを意識しない、生活者として普通に生きていきたいという考えが多いように見られる⁵⁾。彼らのルーツを見ればアイヌ民族の流れはあっても一方では日本人としての子孫でもある。都市部のある青年層の人は「自分はアイヌ時々日本人だと思う。アイヌは選択肢の一つとして選びたい」と述べており、そのことから、彼らが意識せずに生活したいというのは、ある意味ではごく自然な考えであるともいえる。

第6項 未来のアイヌ性

それではアイヌ民族の人たちは将来についてどのように考えているのだろうか。ここでは具体的な政策としてどのようなことを望んでいるのかについて見ていこう。いくつかの選択肢を用意して尋ねてみた（表2-16）。

これらの選択肢の中で多かったのは、「学校教育にアイヌ民族のことを盛り込む」63人、「アイヌ子弟の大学の進学機会を拡充する」62人、「働く場所や機会を提供し、自立できるようにする」52人、「工芸織物技術が受け継がれるように技術の向上、人材育成を図る」46人、「アイヌ民族について研究する組織をつくり、アイヌ民族出身の研究者を養成する」45人、「アイヌ語・アイヌ文化にふれることができる機会を増やす」44人、「観光を盛んにして、アイヌ文化が国内・世界に広く知られるようにする」44人などである。

これらの項目の中で札幌とむかわとの違いに着目すると、「アイヌ民族について研究する組織をつくり、アイヌ民族出身の研究者を養成する」「アイヌ語・アイヌ文化にふれることができる機会を増やす」「観光を盛んにして、アイヌ文化が国内・世界に広く知られるようにする」の3項目に違いが見られた。「アイヌ民族について研究する組織を…」は札幌では35.3%だが、むかわでは52.9%と20ポイント近く異なる。それ以外の2つの項目でも、札幌は30%台だがむかわでは50%前後であり、この3項目に限っては札幌よりもむかわのほうが高い比率であると言える。

一方で平均比率はそれほど高くないが札幌とむかわで異なる比率の傾向であったものとして、「土地を利用し、公有地や川で草木や魚を採れるようにする」36人、「地名をアイヌ語で表記する」23人、「土地資源をアイヌ民族に返還する」24人があった。

まず、「土地を利用し、公有地や川で草木や魚を…」については、札幌では20人（39.2%）だが、むかわでは16人（31.4%）となっている。賛成をした人の発言には、やりたいという意味だけのものもあったが、具体的にサケを取る権利や伝統文化を伝えるためや、自然保護という意識からの発言もあった。またその他や反対する発言内容には、現代社会の中にそれを位置づける難しさについての発言が多くみられた。しかし賛成した人の数は都市部と農漁村部で違いが見られたものの、これらの発言内容については大きな違いは見られなかった。

「アイヌに優先的にすべき。アイヌは持っているものを分け与える」（札幌 壮年）

「自然なやり方でアイヌを取り入れる」（札幌 壮年）

「サケを取る権利」（札幌 老年）

「具体的な権利（サケを取るなど）があったらあったで嬉しい」（むかわ 壮年）

「子どもたちに伝えるためにも伝統文化を実践する場があればいい」（むかわ 壮年）

「草木や魚が減っているので保護して欲しい」（むかわ 老年）

「少しならいいが、それを生業としている人の邪魔をしてはいけない」（札幌 青年）

「アイヌの人にアイヌの昔のような生活をさせることになるといけない。文化も大事だろうがアイヌの人たち全部が今の世の中でそういうことをやっていけるのか？かえって差別みたいになるのでは？」（札幌 老年）

「現実には難しいと思う（反対しているわけではない）」（むかわ 壮年）

「私利私欲で取る人がいるからあまり賛成できない」（むかわ 壮年）

表2-16 国や道に望むアイヌ政策

単位：人、%

政策の内容	札幌	むかわ	全体
学校教育にアイヌ民族のことを盛り込む	32	31	63
	62.7	60.8	56.3
アイヌ子弟の大学の進学機会を拡充する	30	32	62
	58.8	62.7	55.4
アイヌ語・アイヌ文化にふれることができる機会を増やす	18	26	44
	35.3	51.0	39.3
地名をアイヌ語で表記する	14	9	23
	27.5	17.6	20.5
工芸織物技術が受け継がれるように技術の向上人材育成を図る	23	23	46
	45.1	45.1	41.1
観光を盛んにして、アイヌ文化が国内・世界に広く知られるようにする	20	24	44
	39.2	47.1	39.3
働く場所や機会を提供し、自立できるようにする	27	25	52
	52.9	49.0	46.4
自治体と協力し、アイヌ文化を通じて地域を活性化する	16	19	35
	31.4	37.3	31.3
土地を利用し、公有地や川で草木や魚を採れるようにする	20	16	36
	39.2	31.4	32.1
土地資源をアイヌ民族に返還する	16	8	24
	31.4	15.7	21.4
アイヌ民族について研究する組織をつくり、アイヌ民族出身の研究者を養成する	18	27	45
	35.3	52.9	40.2
大学などに保管されている遺骨を国が慰霊する施設を作る	13	14	27
	25.5	27.5	24.1
アイヌ民族と国がアイヌ政策を協議する場を設ける	20	22	42
	39.2	43.1	37.5
国会や道議会にアイヌ民族特別議席を設ける	19	20	39
	37.3	39.2	34.8
その他	18	10	28
	35.3	19.6	25.0

注)表2-1の注を参照。

つぎに「地名をアイヌ語で表記する」である。この項目は札幌は14人(27.5%)、むかわが9人(17.6%)と札幌のほうが多い。具体的な発言内容を見ると、都市部の人に積極的な意見を述べている者が多い。他方で反対やその他の意見では、「読みにくいのでは」「混乱するのでは」という現実的なことを考えての答えが多く、どちらかといえば農漁村部にこの考えに消極的な意見が多くみられた。

「奪われたものを逆にできる」(札幌 青年)

「大事だと思う。カムイの祈りにも地名は大事。カムイと対話するのに重要」(札幌 壮年)

「意味を併記し、カタカナ表記がよいと思う」(札幌 壮年)

「これは実行すべき」(むかわ 壮年)

「今のままでよい。いまさらかえても何も変わらない」(札幌 青年)

「ある程度定着しているので漢字の地名を変えることはしなくてよい」(札幌 老年)

「読みづらいものがある。今変えたら混乱するから」(むかわ 青年)

「悪くはないがとくに必要ないと思う」(むかわ 青年)

「今の時代にすることない」(むかわ 壮年)

「川、山、原野とかならいいが…読みづらくなるのではないかな」(むかわ 壮年)

都市部である札幌と農漁村部であるむかわで異なる傾向が見られた最後の項目としては「土地や資源をアイヌ民族に返還する」がある。全体ではそうすべきと明確に答えた者が24人、必要ないと答えたのは8人、どちらともいえない、その他の答えが17人、無回答が63人だった。「そうすべき」と答えた内訳をみると、札幌16人(31.4%)、むかわ8人(15.7%)となっていた。

具体的な発言をみると、返還すべきという答えの中にも難しさを含んでいる発言も多くみられた。「返還するのがよい」とした人の中に、その土地をどのように返還するのか、その後の使用方法をどうするのかまで言及している人もいる。またその他の答えをした人の中にも、先の返還を求めながらも難しさを述べていた内容とほぼ同じような心配をしている発言がみられた。

これらの内容を見ていくと、賛成、あるいは反対であると具体的な発言を述べた人については、都市部と農漁村部で違いは見られなかった。

「搾取した部分からそこを戻して、そこから基金的に自分たちでプールして活用する」

(札幌 壮年)

「本来持っているものを取られたんだから、返してもらうのは当然なんですけど、それは無理だと思うので。今の国有地であるところを自由に使わせてもらうとか、それに土地を返す相当分のものをお金にして返してもらうとか。」(札幌 壮年)

「アイヌの土地、国の土地と分けるから対立(する)。すべて共有すればよい」(むかわ 青年)

「実際に土地返されても困る。結局は貧しいから助けて欲しいという訴え。極端な言い方してるだけ。ただ、国有地でクマを取ったり、サケを取ったりのアイヌがしていた文化をやるのを認めて欲しいっていうのはあった」(札幌 老年)

「でもいまさら誰に返せばいい？」(札幌 老年)

「いまさら遅い。俺が利用できるのか？アイヌ全体のためなのか？学びの場としての土地返還ならOKだが、アイヌの誰かが儲かるためならダメ」(札幌 壮年)

「元々誰のかわからないなら、難しい」(むかわ 壮年)

「無理だと思う。道や国が協会に土地の貸付などをやって植林事業をすればいいと思う」

(むかわ 老年)

第5節 まとめ

本章では大都市部である札幌と、農漁村部であるむかわに居住するアイヌの人々の声から、これまでの経験や意識を比較し、どのような違いがあるのか、あるいはないのかについて見てきた。

まず、学校教育においては、都市部と農漁村部の違い、さらには年代層の違いがあった。都市部と農漁村部では全般的には都市部の方が教育の機会に恵まれているといえる。またその違いは年齢層が高いほど顕著であった。職業に関しても同様である。とくに年齢層が高くなればなるほど、都市部では安定的な仕事に就いている者も見られるが、農漁村部では無職が目立っていた。一方で地域における職種の差は青年層を中心に少なくなっていた。青年層の場合、むかわであっても、第1次産業に従事している者はごく僅かであり、多くが第3次産業への従事であった。しかし雇

用の形態を見ると札幌もむかわも安定的とはいえない状況は共通である。

最後にアイヌ性に関しては一部の項目について都市部である札幌と、農漁村部であるむかわでは異なる傾向が見られた。むかわではアイヌ民族の周知を含め、アイヌ民族について多くの人に理解してもらい民族の権利を回復したいという傾向が札幌より多かった。いっぽう札幌は、地名をアイヌ語で表記する、川で魚を捕れるようにする…など実際のアイヌ民族の名誉や地位に直接影響するとは言えない項目について、むかわよりも高い比率であった。

このように同じアイヌ民族の人々であっても、居住する地域によって同じ傾向であるものと異なる傾向が見られたことは、現在の環境の影響ばかりではなく、これまでの経験の違いによる影響も大きいと考えられる。今後アイヌの人々の現状や課題を考えるときには、「アイヌ民族」全体に共通である現状を捉えながらも、すべてのことを「アイヌ民族」という一括りにせず、地域性や年齢層という視点を持ちながら検討する必要があるだろう。

注

- 1) 本調査のうち16人は和人であるが、アイヌ民族の定義ではアイヌの血をひく配偶者もアイヌであるとしているため、本調査の対象としている。
- 2) 表2-3の現在の職業については、個人が特定されないように職業別大分類で表記しているが、初職については本人の発言に基づいた表記にしている。
- 3) 実際の調査では、可能な限り曾祖父母の代まで血筋を尋ねている。しかし、曾祖父母の代の血筋が判明している者とそうでない者もいた。そのため、ここでは、曾祖父母の代のデータは用いなかった。なお、表2-10の中でアイヌの血筋が100%になっている者であっても、曾祖父母のいずれかに非アイヌの血が混じっている者もいる。曾祖父母の代まで含めた血筋に関しては、第5章で詳しく検討しているので、参照されたい。
- 4) 結婚の際の苦労については、現在結婚している者だけでなく、離別、死別の経験を持つ者も含めている。
- 5) 「アイヌの血統とアイデンティティ」について、前報告書においては「地球市民、世界人」としてというまとめになっているが、地球市民、世界人というまでの積極的な考えが明確ではないため、ここでは「生活者」としてという記述にしている。

(品川ひろみ)